

時代を生きた先覚者たち

自然豊かな阿南の地で、武骨に、しなやかに、一途に、それぞれの時代を生き抜いた先覚者たちの軌跡を追う。

【其の一】北條民雄

ほうじょう たみ お

1914（大正3）年～1937（昭和12）年 享年23歳

寄稿 阿南市文化協会会長 大和武生さん

彗星のように出現し 満月の如く輝き 幻として消えた作家

作家。阿南市下大野町出身の七條林三郎の次男として、父の勤務地であった朝鮮の京城で生まれた。本名は七條晃司。

父は、陸軍の経理下士官であり、その任地ソウル（朝鮮※注1）で生まれたが、翌年、母の病死（肺炎）により、那賀郡（現・阿南市）の母の生家に引き取られる。父は婿養子であった。

祖父母に「母のない子」として溺愛される。1917（大正6）年、父は退役し再婚するが、民雄は継母になじむことができなかつたのか、父母と別居し、祖父母のもとで育てられる。



北條民雄肖像画（日本近代文学館蔵）

小学校尋常科を卒業後、家庭状況からして当然上級学校に進学すると思われ、父親たちも中学校への進学を勧めていたが、それにも従わず、1929（昭和4）年に年上の友人と上京し、葉問屋の住み込み店員や日立製作所亀戸工場の臨時工など種々の職業を転々としながら、法政中学校夜間部で学ぶ。

1931（昭和6）年、長兄の死（肺結核）により、祖父に故郷へ呼び帰される。祖父のかたわらで農業に従事しながら文学などに親しむ日々を過ごす。この頃、小林多喜二の『不在地主』など、プロレタリア文学の影響を受ける。

1932（昭和7）年6月、当時プロレタリア作家として著名であった葉山嘉樹に手紙を書き返事をもらって有頂天になる。

1933（昭和8）年、19歳の年の秋、祖母方の遠縁の娘と結婚したが、ライ病（※注2）にかかっていることが判明（徳島市のヒフ科専門病院で診断）し、破婚になる。

1934（昭和9）年5月18日、東京都下東村山のライ療養所全生病院に入院する。院内の機関誌『山桜』に短編『童貞記』を発表する。（筆名・秩父晃一）。

1935（昭和10）年、『山桜』5月号に『白痴』を発表する。この作品から十月号一の筆名を使用する。

5月、既に脱稿していた『間木老人』を川端康成氏に送り激励を受け、その紹介で『文學界』に掲載される。その後、すべての作品は川端氏に送り、その紹介で文芸誌に発表されるようになった。

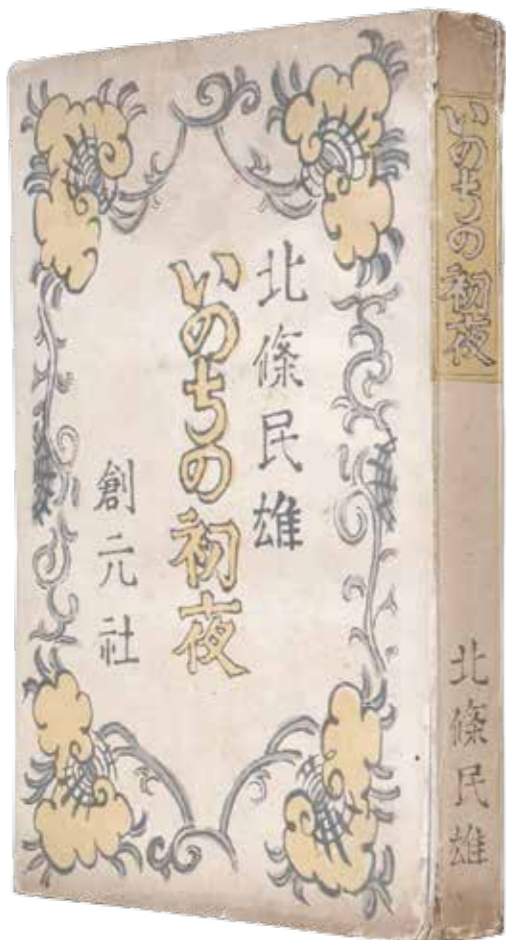
全生病院では、軽症の患者が重症の患者を世話するシステムであり、民雄が初めて体験した病院の様子を明らかにしたのが、最初の作品『いのちの初夜』であった。

「人間ではありませんよ。生命です。生命そのもの、いのちそのものなんです。僕の云うこと、解かってくれますか、尾田さん。あの人達の『人間』はもう死んで亡びて了ったんです…」

（『いのちの初夜』より）

この引用文の意味は、（患者が人間としてではなくただ単なる生命体として生きている）という捉え方であり、それは民雄の正直な感じ方であっただろう。作品が発表された当時（昭和10年代後半1935）においては、「ライ病」が不治の病とされていたために、前述のような表現がなされていたと考えるべきであろう。

この作品は、当初は作者、民雄自身によって「最初の一夜」と名付けられていたが、彼の文学の師であった川端氏によって「いのちの初夜」と改題されて発表された。発表と同時に文壇ばかりでなく社会的にも大きな反響を呼び、その年の文學界賞を受賞した。また、英語およびドイツ語の2カ国語にも翻訳され、ヨーロッパやアメリカなどでも広く読まれたようだ。



『いのちの初夜』

昭和11年12月、創元社刊。生前に刊行された唯一の本となった。刊行されるなり版を重ね、1年を経たらずして2万部が売れた。

日本近代文学館蔵

北條民雄の再発見

次世代を担う小中学校の児童・生徒に、郷土の先輩たちの業績を知ってもらおうと、阿南市文化協会は『阿南市の先覚者たち（第一集）』を発刊しました。北條民雄は、当時としては不治の病として恐れられていたハンセン病に侵され、絶望の中で「生命」とは何かという問題と正面から向き合い、苦しみぬいて、わずか23歳で亡くなりました。本年9月22日で彼の生誕100年を迎えます。この記念すべき時期にあたり、実名を公表することになりました。実名の公表については、遺族や関係者の並々ならぬご理解とご尽力によるものであります。冊子は1冊300円で、阿南市文化会館で購入することができます。ぜひ、多くの市民の皆様にご覧いただき、阿南の先覚者たちの業績を知ってもらいたいと考えます。



大和 武生さん

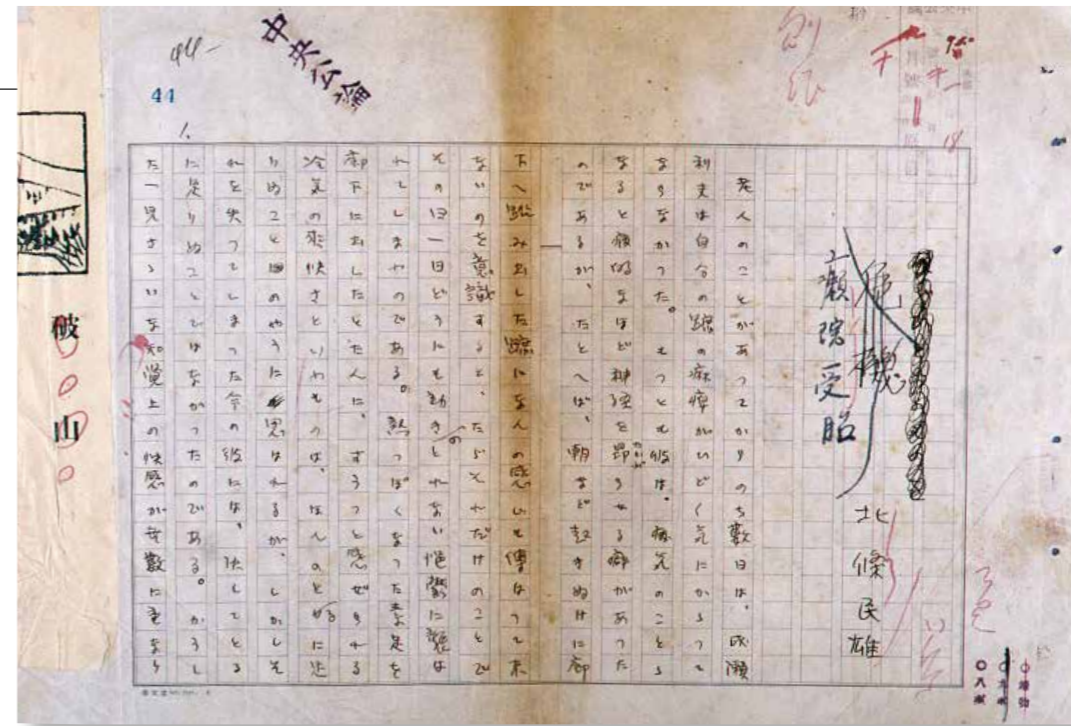


■いのちの初夜
北條民雄が『文學界』（1936年2月号）に発表し、第2回文學界賞を受賞した短編小説。角川文庫ベストセラー。

■火花
ハンセン病を病みながら文学の道を志した北條民雄の絶望と愛、生の輝きを克明に綴り感動の生涯を描いた高山文彦氏のノンフィクション作品。

（注1）朝鮮は当時日本の総督府が設置され日本植民地の一部と見なされていた。
（注2）ライ病は、現代においてはハンセン病と呼ばれ、完全に平癒する伝染病であり完全な治療薬もある。
しかし、皮膚の変形や末梢神経が侵されるような後遺症が残るために恐れられていた。それに加え、明治四十年に日本政府は法律「ライ予防に関する件」を成立させ、ライ患者を指定病院に強制的に入院させる隔離政策を取ったので、社会的にも「恐ろしい」病気であるという印象を国民にうえつける結果となった。

直筆原稿「癩院受胎」
『いのちの初夜』の次に発表された小説。原題は「危機」だったが、川端康成氏により「癩院受胎」に改題された。昭和11年、『中央公論』10月号に掲載された。



日本近代文学館蔵

1936（昭和11）年12月、『いのちの初夜』は『間木老人』『癩家族』『癩院記録』などとともに単行本として出版された。民雄の生前における唯一出版された作品集であった。同書は出版と同時にベストセラーとなり、1年足らずで2万部を売り上げるという、当時としては画期的な発売部数を記録した。

民雄は、病気に対する不安を打ち消すように次々と作品を短期間のうちに発表し続けた。それらの作品は、川端氏を介して『文學界』『改造』『文藝春秋』『中央公論』等に発表された。

そうした過酷な執筆活動の過労からか、慢性の神経症に苦しみ、さらに腸結核にも悩まされることになった。

1937（昭和12）年12月5日、23歳の若さで全生病院において死亡した。直接の死因は腸結核によるものであった。

死後、川端氏の編集により『北条民雄全集』（上下二巻）が創元社から1938（昭和13）年に出版された。

1968（昭和43）年、川端氏は日本人として最初にノーベル文学賞を受賞したが、その折、「北條民雄が生存しておれば、私より先にノーベル文学賞を受賞していただろう」と述懐したと伝えられている。



「北條民雄展」 9月23日祝日まで開催中！

当時、業病と恐れられたハンセン病にかかりながらも文学を志し、川端康成に才能を見出されて名作『いのちの初夜』を生み出した北條民雄。病からくる痛みと苦しみ、次第に身体が崩れていく恐怖におびえながら、死を考え「いのち」を書いた彼の作品と生涯を紹介します。

- 朗読劇「作家 北条民雄の誕生」 8月31日(日) 14:00~15:30
- テーマ朗読会「北條民雄」 9月7日(日) 13:30~14:40
- 講演会 9月20日(土) 13:30~15:00
講師/高山文彦さん（『火花 北条民雄の生涯』著者）

徳島県立文学書道館
〒770-0807 徳島市中前川町2丁目22-1
☎088-625-7485/FAX 088-625-7540
e-mail kotonoha@bungakushodo.jp
開館時間【観覧時間】 9:30~17:00
休館日 月曜日（祝日の場合は開館、翌日休館）
年末年始（12/28~1/4）



『阿南市の先覚者たち』

好評発売中！

1. 青江 秀（郵政）
2. 足利義冬・義栄・義根（平島公方）
3. 栗田徳威（漁業）
4. 大栗清実（医師）
5. 日下八光（画家）
6. 熊野正平（学術）
7. 島津華山（儒者）
8. 竹内十郎兵衛（石炭製造）
9. 佃 實夫（作家）
10. ディオゴ結城了雪（宣教師）
11. 東條作太郎（農業経営）
12. 橋本宗吉（蘭学者）
13. 北條民雄（作家）

価格 300円（1冊）
販売場所 文化会館

阿南市文化協会主催
北條民雄 生誕100周年講演会
日時 9月21日(日) 10:30~12:00
場所 文化会館1階 視聴覚室
講師 高山文彦さん
（『火花 北条民雄の生涯』著者）
参加費 無料

阿南市文化協会（事務局）
〒774-0030 阿南市富岡町西池田135番地1
☎0884-21-0808/FAX 0884-21-0909
開館時間 9:00~22:00 休館日 水曜日